

ハイデガーにおける脱・底的根拠としての存在

——「戯れるから戯れる」という根拠づけへの移行

中 川 萌 子

はじめに

ハイデガーの存在問題の再構築において目指されていることは、自覚の有無にかかわらず存在者の方から存在を捉えてしまうという我々の形而上学的傾向に抗いつつ、存在者からは類推しえない訝しいもの（問うに値するもの）として存在を捉え直すことである。その一環として、ハイデガーは形而上学の根本概念に——否定的概念を用いながら——改変を加え、そうした仕方での存在と我々の関わりを特徴づけた。その一つが、「脱・底 (Ab-grund)」によって規定されている「根拠づけ (das Gründen/die Gründung)」としての現存在の存在了解、そして「根拠 (Grund)」としての存在である (Wml165, Bp380, SGI66等)。「脱・底」は、基本的に「存在者としての根拠」の否定、つまり主観による存在者の存在の表象的根拠づけやその展開としての因果連関における根拠の否定を含んでいる¹⁾。

そうした脱・底によって規定された「存在としての根拠」はさしあたって、因果連関に組み込まれない、従来とは別様の根拠であると言える。

ところで、ハイデガーはその思索のそれぞれの時期に根拠について論じているが、その集大成とも言える後期の *Der Satz vom Grund* (SG)(1955) は、前期の根拠論、*Von Wesen des Grundes*²⁾ (WG)(1929) への批判を含みながら成立している (SG67-69, Wml23) 3)。そしてその批判は、「存在者としての根拠」から「存在としての根拠」への跳躍が十分に果たされていないという点に向けられている。それ故、「存在者としての根拠」から「存在としての根拠」への跳躍、脱・底的根拠としての存在を十全に理解するためには、後期の根拠論における前期の根拠論への批判が明確化され、その問題が如何なる仕方でも乗り越えられたかということが示されねばならない。しかし、ハイデガーはこの点に関して詳述しておらず、

先行研究においてもそれに関して論究しているものはほとんど見受けられない⁽³⁾。

筆者の考えでは、前期から後期への移行を含みつつ遂行される「存在者としての根拠」から「存在としての根拠」への跳躍は、現存在による根拠づけの変化との連関において明確化するものであり、とりわけ「存在者としての根拠」の否定を含む「脱・底」の深化——この深度が、跳躍が十分に遂行されているか否かの一つの試金石であるのだが——は、根拠づけの構成契機である被投性の深化と呼応している。

前期の根拠論においては、我々の実存的目的が強調される中で、根拠づけの構成契機である企投と被投性の意味が限定されつつ企投優位とされることによって⁽⁴⁾、企投自体の不可能性の内への被投性が捉えられていないために、存在企投自体の揺らぎとしての脱・底は獲得されていないと考えられる。そして前期の根拠論の乗り越えに関しては、「転回の思索」⁽⁵⁾が明示されつつ現・存在における存在の根拠づけが論じられる中期の著作 *Beiträge zur Philosophie (Von Ereignis)* (BP)(1936-38) によって手がかりを得られる。転回における存在は、企投自体の不可能性の内への被投性、そして企投自体の内への被投性の開示において、そうした被投性をそれとして企投すること、すなわち「自らによる企投」を「存在による企投／投げ」として遂行することとしての根拠づけを我々に促す。こうした根拠づけにおいては、前期の根拠づけにおいては得られなかった、存在企投自体の変動可能性としての脱・底が獲得されていると言えよう。そして後期の根拠づけは、基本

的には中期のそれに基づいて捉えられるのだが、中期における根拠づけが存在企投の変動の実現のための我々による決断として位置づけられているという点では中期と異なっている。後期において述べられる、我々の恣意から自由な存在の「戯れ(Spiel)」を「存在は戯れるから戯れる」という仕方での根拠づけることは、さしあたって中期における「自らによる企投」を「存在による企投／投げ」へと同化することであるが、他方で飽くまで「戯れ」であるが故に、「自らによる企投」によって「存在による企投／投げ」の変動の実現を決断することさえ放棄させる、脱・底的根拠としての存在の「根拠づけ」でなければならぬ。

このように、後期における脱・底的根拠としての存在は、前期から後期への根拠づけの変化の分析を通して明確化すると言えよう。

1. 企投優位における根拠づけ（前期）

形而上学の基礎づけの試みを論じた前期の根拠論文、*Vom Wesen des Grundes*⁽⁶⁾(1929)(WG)において、近代形而上学において論じられる主客（存在者同士）の根拠づけあるいは因果連関への批判 (WmJ38,186) から、存在者への関わりによる先行する我々の存在了解に焦点が当てられ、存在了解による存在者への関わりの「根拠づけ (das Gründen)」が論じられる。すなわち、先行的に存在を了解しているが故に、我々は存在者を存在しているものとして了解できるのであり、またそうした存在者と存在の区別（「存在論的差異」）においてのみ、存

在者への我々の関わり（実存）が可能になる。しかしこの根拠づけは、存在者同士の根拠づけとしての因果連関とは異なるものの、ハイデガー自身が述べるようにやはり不十分な点を含んでいた。その不十分な点は、根拠づけの構成契機である企投と被投性の意味の制限や企投の優位にあると考えられ、それが「存在としての根拠」の獲得に至らないことの一因となっている。

〈根拠づけの構成契機である企投と被投性の意味〉

WGにおける根拠づけの第一契機としての「企投 (Entwurf)」「建立 (das Stiften)」は、我々の実存的「目的 (Unwille)」のために指示連関に予め意味を与え、それに沿って自らの存在可能性（世界）を形成することである (Wml63)⑥。そして、根拠づけの第二契機としての「被投性 (Geworfenheit)」「地盤の―受け取り (das Boden-nehmen)」は、現存在が「企投するもの」としてやはり存在者の只中に既に存在する」(Wml66) など、言い換えれば「存在者による捕捉性 (Eingenommenheit)」（Wml67）を指す。つまり現存在は、存在する限り常に既に存在している存在者の只中で自らを見出し、現存在の仕方によって自らの在り方が規定されている (Wml66)。このように相反する二つの契機から成る根拠づけは、存在諸可能性の企投を通して自らの実存の「根拠を与え」(Wml65)ながらも、被投性において「根拠を受け取る」(ebd)とこう点で、「根拠の・無さ(脱・底)、無・底の内へと立てる」(ebd)とされる。では、被投性が如何なる意味で現存在を脱・底の内へと立てるのかと言えは、存

在者の既在以前に遡って存在者の在り方を左右することはできないため、現存在は、存在諸可能性という自らの実存の根拠を絶対的・無制約的企投によって完全に与えうることはできないという意味においてであると考えられ、つまり企投の或る種の被制約性を示していると考えられる。確かにその限りにおいて、現存在による根拠づけは、ハイデガーの言うところの主観による絶対的・一方的な根拠づけ（「存在者としての根拠」の根拠づけ）とは異なると言える。

〈企投優位における脱・底の役割〉

ただし先述の通り、自らの実存的目的のためのこの根拠づけにおいては企投が被投性に対して「優位 (ebd)」を持つため、脱・底の内への被投性は企投の制約でありながらも結局のところ企投の補強としてしか働いていない。企投優位において被投性はただ、企投された諸可能性の全体から現実化不可能な諸可能性を排除し、そうして現実化可能な諸可能性のみを世界（存在諸可能性）として現存在に「所有」(Wml67)させるというように働く。言い換えれば、この脱・底の内への被投性によって規定されているところの根拠づけの「有限性」(ebd)は、現存在の実存的在り方の選択の有限性という意味合いが強く (Wml74)、それによって被投性がその根源性において捉えられているとは言い難い。根源的な被投性とは、企投優位における企投自体を揺るがすような死の可能性の内への被投性、つまり企投自体の不可能性という可能性の内への被投性である。被投性が実存的選択の有限性という狭められた意味で捉えられている限り、脱・底は、飽くまで現

存在の実存的目的に沿った従来の企投を損なわない限りのそれとして、諸可能性全体の企投の単なる制限となってしまうっており、その制限によって現実化可能な諸可能性を支えるための地盤を与えている。そこで企投は、実存的目的に沿った絶えざる企投として実存のための揺るがぬ根拠であるかのようであり、脱・底を自らの内に回収してしまっている(8)。

そして、そうした企投された諸可能性の全体と現事実性の内への被投性の開示において、存在者は別様ではなく此様であるものとして我々に現れてくるのであり、そうして存在者への我々の関わりが可能になる(根拠づけの第三契機としての「理由づけ(Begründung)」(Wm168))。こうした理由づけにおいては、存在者が此様であることの理由(存在根拠)は、やはり我々の実存的目的に沿って答えられるであろう。

このように、前期における根拠づけは、「存在者としての根拠」を可能にする主観による絶対的な根拠づけとは異なりつつも、脱・底が企投優位における存在企投・存在自体の揺らぎとして捉えられていないため、存在の自明視を揺るがす脱・底的根拠としての存在を獲得しているとは言えない(9)。

2. 被投性の遂行としての根拠づけの開始(中期)

形而上学超克の試みを論じた中期の著作 *Beitrag zur Philosophie (Von Ereignis)* (BP)(1936-38)における「根拠づけ(Grundung)」は、第一義的には「存在の真理」「自己覆蔵(Sichverbergen)の空け透り(Lichtung)／脱蔵(Entbergung)」(10)の根拠づけ(BP9)であるが(11)、それが存在了解であると

いう点で、実存の根拠づけという前期と同様の意味も含んでいる。ただしBPにおいて、「人間が現・存在として存在を根拠づけること」は「存在が根拠として本質現成すること」によって初めて成立する(BP307)。つまり中期において描かれる我々による存在の根拠づけは、飽くまで脱・底的根拠としての存在に適合する仕方では為されなければならない(「転回」(12))とされており、企投優位の放棄という点で前期のそれと大きく異なっている。加えて中期において特徴的であるのは、そうした根拠づけが、ハイデガーの言うところの「最初の原初(der erste Anfang)」において支配的である形而上学的存在了解から「別の原初(der andere Anfang)」における新たな存在了解への歴史的な移行として位置づけられているという点である(13)。では、このような根拠づけは如何なる仕方では為されるのか。

〈存在の浪費〉

前期の根拠論において、被投性は存在者の只中で我々が存在していることとして企投の単なる補強であった。中期において現・存在における存在の根拠づけは、深化した被投性の経験と共に始まる(BP45,102,304)。その経験は、存在者の只中で存在している中で、存在を自明視する特定の存在企投において我々が常に既に存在してしまっておりかつそれに無自覚であるというものの自覚の経験である(BP45,102,304)。我々は、日常的に存在者に慣れ親しむ中で、存在者から追加的に類推されうる「存在者性(Seiendheit)」(BP174)として存在を捉えている。存在者性という存在了解は、存在者が現在

において可視的であり（現前的なもの）かつ持続する（存続的なもの）（BP188,209））から類推された「存続的現前性（Beständige Anwesenheit）」（BP191）〔非覆蔵性（Unverborgenheit）／脱蔵（BP339,340）〕とどう存在了解である。そうした存在了解のもと、非覆蔵性／脱蔵という同様の仕方では存在している存在者は、我々による予測・算定が可能なもの、因果連関に基づいて一般的に誰もが利用しうるものとして捉えられている（BP110,120）（「工作機構（Machenschaft）」（14））。そこでは、存在了解自体が問題になることはなく、存在企投自体の内への被投性、あるいは存続的現前性という「特定の」企投の方向と射程」（BP231）の内への被投性は隠蔽されており自覚されない。こうした存在了解が、プラトンからニーチェまでの伝統的形而上学を規定している。「最初の原初」における形而上学的存在了解であるとされる。

〈存在の浪費の拒否（脱・底）①・存在の覆蔵の空け透き／脱蔵〉

しかし存在は、存在者をただ公共的に利用可能なものとなすことの極まりの中で「存在の浪費に対し向かう純粋な拒否（Verweigerung）」（BP238）、あるいは「最初の原初」の同行を拒絶する（15）（versagen）」（BP178）として自らを露呈するとされる（16）。存在の拒否は「存在における非（Nicht im Sein）の内性」（BP264）と連関していると考えられる。存在は、自らの単なる保持としての永遠不変的な持続（「存続的現前性」）ではなく、そのつとその内に通常覆蔵されている「他性（Andersheit）」（BP267）を含んでおり、つねに揺らぎの状態

にある。言い換えれば、存在は「算段・表象不可能性」としての「自己覆蔵（Sichverbergen）」（BP252）を孕むものであるが故に、存在の現れにおいては、存在の覆蔵が覆蔵されたままにされるか、あるいは空け透かれる／脱蔵されるかの争いが絶えず起こっている（BP265）。このように、存在の現れは日常的な公共性における覆蔵無き存続的現前性に固定されているわけではなく、別様に変動する可能性を持っている。ここで、通常の存在の自明性・不変性が拒絶・否定されて揺らいでおり、存在の「自己覆蔵の空け透き／脱蔵」（BP293,350,352,380）としての「脱・底」（BP380）が開示されている。ここで脱・底とは、我々が把握する限りの目的・原因や、我々が自明視する常に同様の存在の現れという根拠によって満たされず、「空のままにしておくことの際立った根源的な仕方」（BP379）であり、そうした意味で「根拠の拒絶（Versagung）」（BP380）である。

〈存在の浪費の拒否（脱・底）②・死の可能性の内への被投性〉
 そして存在の覆蔵は、通常覆蔵されている現・存在の「最も極端な可能性」（BP244）としての死の内への被投性と連関している（16）。我々は現・存在として存在しており常に既在企投しているのだが、もはや存在できず存在企投できないという究極的な変化の可能性としての死の可能性を絶えず含んでおり、その可能性を決して排除することができないため、つねに揺らぎの状態にある。つまり、死の可能性の内への被投性から現（存在の開示性）の内への被投性が捉えられ（BP283,324,325）、そうした存在企投の究極的な変動の可能性

が開示されることによって、存在企投自体の内への被投性、そして従来の企投（「存続的現前性」）の内への被投性が明らかにになり、それと同時に別様の企投が可能であることも明らかにになる。そこで日常的な存在企投の自明性という根拠が最も極端な仕方でも揺るがせにされる。そしてこの死の可能性の含みでもって、我々がもはや存在しないがために存在は我々にいかなる意味においても現れないという、存在の究極的な変動可能性としての完全な覆蔵が空け透かされている／脱蔵されているために、現・存在は「完全に脱・底的な現・存在」(BP268,285,297,324)⑱であると考えられる。では、こうした脱・底は如何にして根拠づけられるのか。

〈脱・底の根拠づけ①…前期と中期の違い〉

ここで要請されている脱・底の根拠づけ⑱は、脱蔵と覆蔵の争いを「争い抜く」中で、存在の覆蔵の開示性／脱蔵を「耐える」(BP301,307)と、「別の原初」へ向けた「決断(Entscheidung)」・「準備(Vorbereitung/Bereitschaft)」(BP13,31,63)⑲によって為されるのであり、それには従来の企投の「断念(Verzicht)」(BP22,62,48)（従来とは別の仕方で「最初の原初」と関わることを含む）が含まれている。そして、こうした脱・底の根拠づけは前期における企投優位の根拠づけにおいては為されない。というのも、存在の変動の可能性（脱・底）が開示されるためには、先述の通り企投自体の不可能性の内への被投性が、そして歴史的に規定された特定の企投及び企投自体の内への被投性が隠蔽されずに企投されねばならず、そうした被投性の開示性に適合するという仕方でも企投されね

ばならないからである（「転回」）⑳。それは、根拠づけが企投優位における企投自体を揺るがすような被投性によって規定されているということであり、それ故にそうした根源的な被投性を担うこととしての企投は「存在による企・投／投げ」・「企投としての存在という別のもの」(BP47,45)であるとも言われるのである㉑。このように、前期において述べられたような企投優位の根拠づけの中で垣間みられるような脱・底ではなく、企投優位の根拠づけを放棄させるような企投の揺らぎとしての脱・底が開示される中で、それに合わせて根拠づけが変様させられるのである。こうした点は後期において描かれる根拠づけと共通する点である。

〈脱・底の根拠づけ②…中期と後期の違い〉

他方で「脱・底」がまた、「最初の原初とその歴史がもはやないことへと、別の原初の実現がまだないことへと」の間(das Zwischen)という脱・底的な只中(das abgründige Innitten) (BP23)であるとされる中で、上述の根拠づけは、「別の原初」の実現の「決断」のための「決断」(BP13,100,102)と、いう意味での「準備」として要請されている節がある㉒。つまり中期の根拠づけには、上述のような存在企投の変動可能性（脱・底）の開示の内に留まること以上の意味が付与されており、そこに企投優位の名残があると言える。この名残とは、一つには「最初の原初」としての従来の存在企投の変動、つまり「別の原初」としての新たな存在企投の実現の際の直接的決断と、もう一つにはこの直接的決断の実行のための準備的・間接的決断として「最初の原初」から完全に決別することと

いう意味での「断念」であると考えられる。その限りで、中期においてはまだ存在企投の仕方が最終的には我々による決断的企投次第で根本的・原初的に変動するものとして捉えられていると言える。それに対して後期において述べられるのは、飽くまで「戯れ」としての「存在による企・投／投げ」の根拠づけであるために、「最初の原初」からの決別という決断も放棄すること、どこまでも間接的な存在変動への関わりとしての根拠づけである。

3. 「戯れるから戯れる」という根拠づけ（後期）

後期において脱・底的根拠としての存在は、存在が我々に自らを開示する運動（存在による企・投／投げ）としての「戯れ (Spiel)」であるとされ、我々による「根拠づけ」は、「存在は戯れるから戯れる」(SG169)と捉えつつ「戯れることの内へと沈みゆく」(ebd.)ことであるとされる。では、「戯れるから戯れる」という「根拠づけ」は如何なるものであろうか。

〈根拠律の「厳密な解釈」とその展開〉

ハイデガーによれば、ライブニッツによって発見された根拠律「何ものも根拠無しには存在しない」(SG3)には「何ものも与え返されるべき十分な根拠無しには存在しない」という近代的な「厳密な解釈」(SG34)が通常与えられている。主観がそれに出会うところの対象は、主観の「表象作用 (vorstellen)」によって主観に対するものとして存在根拠を与えられて初めて「対象 (Gegenstand)」として「存立する (sicheln)」

(SG35,36)のであり、また主観はそのように事物を自らの対象として「存立させる (stellen)」ところの根拠として存立している (SG41,42)。そこでは、主観によって対象として存立させられているか否かということが、存在しているか否かの基準となる(対象性という存在了解)。そしてこの近代的な「厳密な解釈」は、現代において極端に展開しつつ猛威を振るっていることされる。現代においてもやはり人間は表象作用を通して事物を存立させているが、それは主観による対象の根拠づけのような人間による事物の一方的な支配ではもはやない (BF30)。事物は——殊更誰に対してというわけではなく——公共的に常に既に「存立させ (stellen)」られ「用立て (bestellen)」られており、人間自身も事物を用立てることに向けて絶えず用立てられている (ebd.)。そして、いつでも誰にとっても用立てられるか否かということが、存在しているか否かの基準となる（「存続性・用象化 (Standigkeit/Beständigkeit)」という存在了解 (SG51)。そうした意味において、人間も事物も同様にこの仕組み（総・駆り立て体制 (Gesell.)）の内へと巻き込まれており、因果連関における原因・結果と化している。

〈根拠に対する別の観点の示唆／根拠の無効化としての根拠〉
そして、そうした主観による表象的根拠づけやその極端な展開の中で、根拠に対する別の理解の仕方が生じてくるとされる²³⁾。それは、ライブニッツの同時代人であるシレジュウスの詩句「バラは何故無しに (ohne warum) 存在する。バラは咲くから (weil) 咲く。」(SG53)によって示唆される。ハイ

デガーの解釈によれば、この詩句における「何故無しに (ohne warum)」において、「何故」という問いを通して我々によって殊更に問い求められて与えられる限りでの根拠 (「厳密な解釈」における根拠) が否定されているのに対して、この「何故ならば (weil)」によって「何故」と問う以前に存在者が既に持っている根拠存在 (存在根拠ではない) (SG55) (「厳密な解釈」の妥当領域外にある根拠) が肯定されている (SG62)。

つまりここでの「何故ならば」は、通常の「何故ならば」において与えられる根拠 (先の「何故」に対する答えとしての根拠) とは異なり、我々によって把握される限りでの原因を付け加えはしない。ここでの「何故ならば」においては、或る種のトートロジーが敢えて用いられることで、通常の「何故ならば」で表されるはずの従来の根拠の無効化 (脱・底) が遂行されており、それによって対象をそれ自体へ委ねるといふ根拠づけが為されている (odd)。「バラは咲くから咲く」と解するとき、我々はバラが咲くこと自体の内に留まり、ただ咲くこと自体を肯定している。そこにはそのバラが観賞用になる等の算段は働いておらず、「バラが咲く」理由は我々の通常の理解によって汲み尽くされないものとして捉えられている (24)。

〈戯れとしてのピュシス…中期との共通点と相違点〉

さて、先の詩句「バラは咲くから咲く」で示されていたのは、表象的根拠づけによる存在根拠の付加の否定と、表象以前に存在者が既に持っている根拠存在であった。ここで、存

在者と根拠の共属性ではなく、存在と根拠の共属性が我々に開示されている (SG69) (25)。つまり存在は、それ自体が根拠であるためにそれに先立つ更なる根拠を必要とせず (「脱・底」) (SG77, 166)、我々人間による表象的根拠づけによってその根拠が補われてはならない。ここで存在は「我々から見られる限りにおいて開示される」のではなく、我々によって見られるか否かにかかわらず「おのずから開示する」 (SG94) こととしての「ピュシス」として見て取られている。存在は、そのつどおのずから開示することとして、それぞれの時代の様々な仕方や段階における脱蔵と覆蔵の争いとして生起する (SG11) (26)。

しかし、近現代において存在が対象性・存続性として自らを送って来る限りにおいて、存在は「(我々が) 先行的に聴き取ることができない決断性と排他性の内へと自らを送ってゐる」 (SG130)。つまり、中期において既に述べられていたように、我々は既にたいいて対象性・存続性としての存在企投を決断してしまっていることの無自覚において存在している。ここでは、存在の脱蔵と覆蔵の争い・存在の現れの別様の可能性は我々に対してほぼ完全に覆蔵されており、覆蔵を非脱蔵として排除した脱蔵としての対象性・存続性のみが存在であるとして捉えられている。他方で、これもまた中期において述べられていたように、「死の近くに住むこと」 (SG167) において存在の現れの変動が我々に開示されるとされる。つまり、存在不可能性の内への被投性の開示によって、これまで覆蔵されていた存在企投自体の内への被投性、しかもピュ

シスとしての存在による我々の存在企投の規定、つまり従来の存在企投の内への被投性が見て取られ、また従来とは別様の企投の可能性も見て取られる。

ただしここで中期と異なるのは、我々による企投が「存在による企投／投げ」に基づくということがより強く捉えられているという点であろう。つまり我々は今や、存在企投の変動の可能性の開示において、「別の原初」という存在の変動の実現の直接的決断とそれに向けた間接的決断において「最初の原初」の断念として自らの企投を為すことは求められておらず、むしろそうした意図を放棄するよう求められているのである。我々は、存在の測り知れなさに臨んで「存在による企投／投げ」を自由に働かせるというように自らの企投を遂行する中で、歴史的に為されてきた存在企投の様々な段階や支配的な仕方が——またその中で掻き消されていった「バラは咲くから咲く」といった別様の存在企投の諸可能性が——現れる場、つまり「存在の歴運(Seinsgeschick)」の現場に留まり続けるよう求められているのである。このように——「最初の原初」と「別の原初」とを峻別して「最初の原初」からの決別を画策するのではなく——むしろ「最初の原初」の本質を見て取る中で原初の多様な可能性を見て取ることが、存在の脱蔽と覆蔽の根本的運動を見て取ること、ピュシスをそれとして捉えることである。こうしたピュシスの運動は「あらゆる恣意から自由」(SG16)な運動であるが故に「戯れ(Spiel) (abd) である。そしてそれは、従来の存在企投という根拠に常に同様に依拠できるわけではなく、また如

何なる存在企投へと如何にして移行するのか、あるいはそもそも移行するのか否かということが自らの決断に依つては最終決定されないという意味で「脱・底」であるのであろう。「戯れるから戯れる」という根拠づけ

以上の通り、後期におけるピュシスとしての存在のおのずからの開示は、中期と同様、死の内への被投性・存在企投自体の内への被投性をそれとして企投するという仕方での根拠づけを要請する。ただし、そうした被投性はより根深いものとして経験されており、存在企投の変動の実現自体は我々の如何なる意志決定をも超えたおのずから生じる事態であることが確認されねばならないとされる。そして、存在の問いを指す我々に求められていることは、「最初の原初」からの決別ではなく、あくまで「最初の原初」に内在的でありながらその本質を捉えて存在企投の様式が別様でありうること(「脱・底」)を知っているということであり、そうした仕方では——次の変動が「別の原初」として生じるのか否か分からないまま——何らかの可能的な変動に対して準備するということだけである。こうした我々の企投は「存在による企投／投げ」への適合であり、ピュシスとしてのおのずからの開示そのものである。このように我々による企投が「存在による企投／投げ」とほとんど同化する中では、我々の「根拠づけ」は「何故存在は戯れるのか」と問いつつ「存在は戯れるから戯れる」(SG16)と答えつつ「戯れの内」に留まる」(abd)のであろう。

おわりに

後期における脱・底的根拠としての存在は、前期における企投優位の根拠づけも、中期において述べられた被投性をそれとして企投することでありながら「自らによる企投」によって「存在による企・投／投げ」の原初的な変動を実現しようとする根拠づけも「恣意」として放棄させ、被投性に完全に従った企投、「存在による企・投／投げ」への適合としての根拠づけを要請する。後期における「存在は戯れるから戯れる」という根拠づけは、このような仕方方で、前期・中期における根拠づけの批判として成立しているのである。

注釈

(1) 「存在者としての根拠」が意味するところは、「存在者と根拠」の同一視のみならず「存在者性といった存在者から類推された」存在と根拠」の同一視も含んでいる。それに対して「存在としての根拠」は、後述するように、「存在の本質現成・覆蔵の空け透きといった」存在そのものと根拠」の同一視である。

(2) SGにおけるWG批判に関しては、「根拠律が直接的には根拠についてではなく存在者について述べているという洞察は、危険な歩みである。(中略)このことはWGにも該当する。WG第一部の冒頭(Wm127)(中略)の表現は依然として正しい。しかしそれは誤りへと導へ」(SG67,68)と述べられている。この誤りは、根拠律を単なる「存在者と根拠」の同一視にしてしまうことによって「存在と根拠」の絶え

ざる「調和」(SG68)が見逃されてしまうという点にある。またWGにおいても「つねにまだその転回における存在の真理の遮蔽のもとで現・存在を考える無駄な試み」(Wm174)というWG批判の注釈が付されており、加えて「SGにおけるこの論文の自己批判を参照のこと」(1967)(Wm123)という注釈も付されている。

(3) 管見の及ぶ限り、SGにおけるWG批判を主題とした先行研究は僅少であり、また不十分な点を持つ。例えば、茂牧人はWGの脱・底を現存在の被投性と企投の争いの根底として、BP・SGの脱・底を存在の覆蔵と非覆蔵の争いの根底として特徴づけているが、中期・後期における脱・底が前期の脱・底と如何なる連関を持つのか、何故前期から中期・後期への変化が必要だったのかといった重大な疑問に答えられていない。

(4) 前期の企投優位に対する自己批判の記述は、ハイデガーの中・後期の著作・論文においては少なからず。Wm337等を参照のこと。

(5) BH(946)においてSZの挫折の原因となったと記されている「転回」は、古くはハイデガーの「思索の転回」を指すと捉えられていたが、BP等の30年代の著作の刊行により、第一義的にはBPの「性起における転回」の思索(「転回の思索」)を指すという解釈が主流になっている(渡辺二郎(S23)等)。筆者も後者の解釈に与しており、本論文において「転回」は基本的に我々と存在との相互的関わりを意味する。詳しくは拙論稿「転回」における存在の拒否(「アルケー」二十一号(二〇一三))を参照のこと。

(6) こうした企投は、意図・計画を先行的に可能にする「意

志(Wille) (Wm163)、言わば存在への前意志として、人間の側からの存在への関わりを意味している。

(7) 加えて、根拠づけが「脱底として」了解されるならば、存在者の内での存在者による現存在の捕捉性の本質がより先鋭化される。(Wm174,175)とあることから、やはり(7)で脱・底は根拠の受け取りとしての存在者による捕捉性、即ち被投性との連関において述べられていることが分かる。

(8) つまり、企投優位における根拠づけにおいては脱底は確保されず、我々人間の実存的目的が自らも含めた存在者の存在根拠であるかのようになってしまう。

(9) 他方でWGにおいて現存在の被投性は、上述の意味以外に、「超越(根拠づけ)」という現存在の存在体制が現存在によって選択されたものではない」という「無力(被投性)」(Wm175)として規定されている。この超越の内への被投性は、存在企投の内への被投性を意味しており、確かに「存在者による捕捉性」とは異なる次元の被投性を指している。しかしこうした被投性は企投自体の不可能性の内への被投性を明示しているとは言えず、それ故に根源的な脱・底を示すものではないと言える。また、WGは“Was ist Metaphysik?”(1929)(WM)と対であり、WGの脱底の内への被投性の軽減は、WMの被投性の記述によって補われている。そこで我々に開示されているのは、一つにはWGにおいて無力において示されていた存在企投の内への被投性であり、もう一つにはWGにおいては開示されなかった、現存在の存在自体の理由の無さ・不可能性、つまり企投自体を揺るがす企投不可能性としての被投性であると考えられる。だがいずれにせよ、脱・底が如何なる仕方根拠づけら

れるかは、前期においては述べられておらず、中期において明確化すると言いうる。詳しくは拙論稿「形而上学」に對峙するハイデガー(『人間・環境学』二十三卷(二〇一四))を参照のこと。

(10) 覆蔽は、脱蔽・空け透き(覆蔽の部分的・偶発的克服と除去)と対であり、「最初の原初」である古代ギリシアの真理概念(アレテーイア)(非・覆蔽性)の構成契機(BP339)だが、「最初の原初」において覆蔽は非現前≠非存在とされ「覆蔽」という出来事は失われた(BP330)。それと連関して覆蔽はまた「存在の表象不可能性及び最高の訝しむ」(BP252)によって特徴づけられる。

(11) 他にもBP528,70,242,312,330,352を参照のこと。

(12) 以下の引用も参照のこと。転回とは「存在による呼びかけと現・存在の聴従」である(BP7,18,64,311,372,407)。「性起は自らの内に現・存在を根拠づける(Ⅰ)」。現・存在は性起を根拠づける(Ⅱ)。根拠づけることは、ここで転回である。Ⅰ支えとなり聳える。Ⅱ建立し企投する」(BP261)。

(13) 中期における根拠づけは「最初の原初から別の原初への」移行の開示の根拠づけ(BP23)である。そして「最初の原初」は伝統的形而上学やその存在了解としての「本質現前」(Anwesen) (BP260,261)を指す。対して「別の原初」は新たな存在了解の獲得を示しており、存在の本質現成・覆蔽の空け透きとの連関において捉えられる。また、「最初の原初から別の原初への」移行は「形而上学の超克」(BP172)・「否定」(BP178)・「最初の原初から遠ざかること」(BP185)を通して為される。

(14) 工作機構は後述する「総駆り立て体制(Ge-stell)」の前

形態として位置づけられる。

(15) 以下の引用も参照のこと。「しかしこれらの一見単に有害なもの、そして語り拒むもの全てから、存在の本質に対する全く別の洞察が発現し、存在それ自身が拒絶として自らを露呈させるとすれば、あるいはともかくも響きへもたらずとすれば、どうであろうか」(BP128)。

(16) 以下の引用も参照のこと。「現存在を構成するところの」現には、その最も極端なものとしてその最も固有な開示の内での覆蔵性が、耐えざる可能性としての離存在(ここでは死という現の最も極端な可能性の意味)が、属してゐる」(BP324)。

(17) 以下の引用も参照のこと。「死を現存在の内へと引き入れ、現存在をその脱底的な広さにおいて考慮し、存在の真理の可能性の根拠を完全に測定することが重要である」(BP285)。

(18) 脱・底も或る仕方で根拠である。以下の引用も参照のこと。「脱・底(*Ab-grund*)は「脱・底(*Ab-grund*)」であらう」(BP379)。「脱・底はあらゆる根拠に対する否ではなく、覆蔵された広さと遠さにおける根拠への然りである」(BP387)。

(19) 我々の「準備」は、根拠づけの完遂としての「存在者の内に存在の真理(覆蔵の空け透き)を蔵すること(Bergung)」(BP27)と連関する。芸術や詩作などの事物の製作・獲得において、我々は、存在者がその存在の訝しさに基づいてより存在するようになるという事態を捉える可能性を有する(蔵すること)。つまり我々は絶えず存在者へと関わりながらもあるいはむしろ関わることを通して、従来の企投(存在の自明視)へと再び陥ることなく別様の企投の可能

性の内に留まるようになりうる。BP27,70,71,100,348,349も参照のこと。

(20) こうした企投は、通常覆蔵されている被投性の開示を戦い取ること(BP56,328,392,448)であり、「企投の投者が被投的なものとして自らを経験する」という仕方である(BP239)。「投げにおいて初めて現れる現自体の被投性の覆いなき実行」(BP328)としてなされる。またこの点が「あらゆる超越論的認識様式との違いである」(BP239)とされる。

(21) 以下の引用も参照のこと。「存在の企投は存在それ自体によってしか投げられ得ない」(BP447)。「存在の「本質」としての」企・投(BP451)。「存在の企投という伝来のものと企投としての存在という別のもの」(BP453)。

(22) 以下の引用も参照のこと。「最初の原初の終わりに結びついたままでいるか別の原初を開始するかについての」最後の決断の時空間を準備すること」(BP13, 228,229)。「拒否の知は真理についての決断の長い準備として展開される」(BP65)。「決断の本質は「存在(Sein)」「存在の本質現成」か非存在(Nichtsein)かである」(BP101)。「決断にこつての決断(転回)」(BP102)。

(23) これは中期において述べられた、存在の浪費の極まりの中でその絶えざる拒絶が露呈する事態と同様である。根拠の別様の響きは稀にしか聴き取られることのない響きであり、現代の支配的な形而上学的根拠要求(総・駆り立て体制)という「存在の歴運」の中で掻き消されていた響きである(SG85)。

(24) 別言すれば、「咲くから咲く」は従来の根拠の形態を取りながら従来の意味を拒むが故に、従来の理解の限界を限

界として表している。

(25) ハイデガーの解釈によれば、(1)で根拠律は、第一の音調である「何ものも根拠無しに存在するのではなし」、「あらゆる存在者は根拠を持つ」においてではなく、第二の音調である「何ものも根拠無しに存在するのではなし」(SG65)において了解されるようになり、「存在と根拠の調和(Einklang)」(SG69)が聴き取られるようになる。

(26) 存在者は古代ギリシアにおいて「対向(Gegenüber)」(SG121)において現前するものとして「人間に襲来するもの」であり、近代における対象性において現前するものよりも「より存在していた」(SG129)とされる。

参考文献

M. Heidegger, Gesamtausgabe, Klostermann

Bd. 9: *Wegmarken* (Wm), 1976 : „Vom Wesen des Grundes“ (WG) (1929), „Was ist Metaphysik?“ (WM)(1929), „Brief über den Humanismus“ (BH)(1947)

Bd. 10: *Der Satz vom Grund* (SG)(1955/56), 1997

Bd. 65: *Beiträge zur Philosophie* (BP)(1936-38), 2003

Bd. 79: *Bremer und Freiburger Vorträge* (BF) : „Das Gestell“(1949)

渡辺二郎『渡辺二郎著作集第4巻ハイデッガーⅣ』、筑摩書房、2011

茂牧人、『ハイデガーと神学』、知泉書館、2011

ジャン・グレーシユ(杉村靖彦訳)、

「一体なぜ(なぜ)なのかーハイデガーとキリスト教神秘主義」

京都大学文学部宗教学研究室紀要、2008

Martina Roesner,

Metaphysica ludens : das Spiel als phänomenologische Grundfigur im Denken Martin Heideggers,
Phänomenologica Bd.167, Springer, 2003